

私を育てた
あの時代、あの出会い

第8回

「教育とは人を信じ抜くこと」 新任校での日々が信念を生んだ

鹿児島県 志布志市立香月小学校校長 尾場瀬優一 OBASE YUICHI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、尾場瀬校長が語る。

間違いを排除せず
正しい道に導くのが教育

初任校は、現在校長を務める香月小学校でした。着任のあいさつをした時に諏訪校長からいただいた言葉を、今でもはっきり覚えています。「自分の考えを信じて思い切り教育をしてください。先生が失敗した時に責任を取る係として私がいまこうおっしゃいました。「私は何もしないので皆さん、頑張ってください。皆さんの頑張りを信じています。もちろん、校長は何もしないわけ

ではありません。ある時、理科の授業で夜に星の観察をする計画を立てました。「夜に授業は出来ない」という言葉と共に校長が提案してくださいました。「PTAが親子の星座観察会を開いたら指導者として協力できるか」ということでした。全校児童を対象として企画された星座観察会は、大成功に終わりました。子どもたちに「本物」を通して学ばせることは、さまざまな工夫をすれば実現できることを私は学びました。校内でビー玉遊びが流行し、その対応を巡って教師間で意見が分かれた時には、諏訪校長は最後まで現場



おぼせ・ゆういち 専門教科は理科。金峰町立（現南さつま市立）白川小学校、鹿児島県総合教育センター研究主任などを経て、現職。酪農教育推進委員会九州地区委員長、ソニー科学教育研究会鹿児島支部長（2012年5月～）なども務める。

1977（昭和52）

新採として
志布志町立
（現志布志市立）
香月小学校に赴任。
諏訪校長と出会う



香月小学校の先生方と。
前列右から3番目が
諏訪校長、
2列目の左端が
尾場瀬先生

1986（昭和61）

鹿児島大教育学部
附属小学校教官に着任

1998（平成10）

酪農教育ファーム
推進委員会の
専門委員に就任し、
酪農を通じた命の教育の
普及に尽力する

2003（平成15）

南種子町立中平小学校に
校長として赴任

2007（平成19）

三島村立片泊小中学校
に赴任

2010（平成22）

志布志市立香月小学校
に赴任

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

「信じる、とことん信じる それしか教育の方法はない」



と教育活動に専念でき、私は教育的に必要なことは絶対に行うという信念を抱くようになりました。

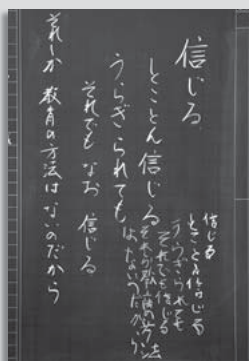
学校が人間教育の場で あり続けるように

これまで、私は問題行動を起こす子どもとも多くかかわってきました。彼らに1日の出来事などを聞いて、「自分の人生を無駄にするなよ」と語り掛ける。子どもの気持ちが上がって、学校に来たと思ったら問題行動を起こす。この繰り返しでした。でも、私は子どもたちを信じ、粘り強く語り掛けました。たとえ裏切られても、子ども自身がより良くなりたい、変わりたいと思うようになることを願い、教え続けるのが教育だと思っております。

議論は平行線をたどり、業を煮やした私は「教育の場で教育をしないのなら、教育者を辞めます」と辞表を出しました。すると、諏訪校長は「尾場瀬先生の言うことにも一理あります。ルールを守るなら遊んでよいと、全校朝会で尾場瀬先生に語ってもらってはどうか」と提案されました。教師たちの意見はましまり、全校朝礼を経てルールの下でビー玉遊びは続けられました。諏訪校長の下で、教師は伸び伸び

何十年の時を経て、私は初任校に校長として戻ってきました。かつて諏訪校長がされていたように、私は自分の信念を伝え、後は先生方を信じて、全てを委ねています。若手の先生も多いので、経験不足から失敗をすることもあります。でも、間違いを決して非難せず、これからどうすればよいのかを一緒に考え、サポートするようにしています。信じられていると思うからこそ、人間は変われるのであり、相手を信じようとするのだと思います。人は、命令や法によって動くのではなく、意気に感じて動くのだと考えます。

私は、学校経営をただ単に円滑に進めたいと思っはけません。山あり谷あり、それでもよいのです。学校が、子どもはもちろん、教師も含めて人を育てる人間教育の場であり続けるように、学校づくりをしたいと思っております。



校長室の黒板には尾場瀬校長が書いた信条があり、そばに子どもがならって書いた言葉が並ぶ

の教師に判断を委ねようとされまして。子どもが夢中になりすぎて授業に支障を来すようになったためビー玉遊びを禁止すべきだ、という意見に対し、私は「禁止にすれば問題はなくなるが、子どもの教育は成立していません。単に禁止するだけでよいのですか」と猛反対をしました。人間は、行動することで間違うことがある。しかし、それを排除するのではなく、正しい道に導くことが学校がすべき教育だと思っております。

議論は平行線をたどり、業を煮やした私は「教育の場で教育をしないのなら、教育者を辞めます」と辞表を出しました。すると、諏訪校長は「尾場瀬先生の言うことにも一理あります。ルールを守るなら遊んでよいと、全校朝会で尾場瀬先生に語ってもらってはどうか」と提案されました。教師たちの意見はましまり、全校朝礼を経てルールの下でビー玉遊びは続けられました。諏訪校長の下で、教師は伸び伸び